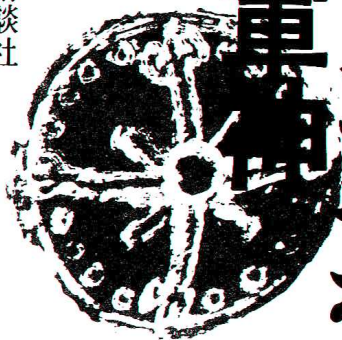


安岡章太郎

ドンキホーテと

軍神



講談社

ドン・キホーテと軍神

昭和五十年四月二十日 第一刷発行

著者〓安岡章太郎

編集・制作〓第一出版センター

発行者〓野間省一

発行所〓株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号一二二

電話〓東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替〓東京三九三〇

印刷所〓豊国印刷株式会社

製本所〓大製株式会社

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。(セ)

© 安岡章太郎 一九七五年 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

ドン・キホーテと軍神 目次

I

ドン・キホーテと軍神

忠誠心とさところ 11

ドン・キホーテと軍神 15

他人の戦争 40

ネイヴィマン・イズ・オネスト

II

ぼくの老爺心

48

静かな動乱期 55

或る断絶感 64

休日煩悶 74

水銀シヨック 83

ヨソ者意識 92

大学と揺り籠 101

建築・電話・暴力 110

紙・闇・統制 119

石油ショックとアニマル的性格

128

変る新宿

137

複製時代

146

Ⅲ

身辺瑣事

犬の戸叩き

157

暖炉のある家

159

子が親に似る遺伝の不条理

162

娘よおいに長風呂せよ

167

休日恐怖

171

無味乾燥のケムリ

175

Ⅳ

独断偏見録

フリー・セックス時代はくるか？

181

「ヘ・コシロ」のこと

186

医者とニセ医者

191

道樂の近代化	196
隠居の傑作	201
ひとしからざるを愁う	206
仕事さきのお茶	211
陰気なウソつき	216
虎穴に入って食われるなかれ	221
マッキの眼	226
タンラク時代	231
怖るべき庶民性	236
美術館の重圧	241
虚無的な世相	246
どちらがデタラメ?	251
趣味の値段	256
レジャー地獄	261
秋風落莫	266
風流について	271

V

時代の変り目	276
ローデシア追放を祝す	281
方言の感傷	
私の中の泥棒考	289
意外だった多摩川決壊	295
民族的劣等感	298
アホダラ経か初荷の馬か	302
方言の感傷	307

装幀 山藤章二

ドン・キホーテと軍神

安岡章太郎

I
ドン・キホーテと軍神

忠誠心とさとどころ

私は、ふだん自分のことばかり考えて暮らしているせいか、戦後三十年もたって、上官の命令がなければジャングルから出るわけにはいかない、などといっている人の話をきいても、ちょっと本当のこととは思えない。もちろん、ジャングルに三十年もぐっていた人を常人の常識で考えようとしたって、わからないにきまっている。それにしても、肉親の兄の姿をつい五〇〇メートルの距離で確認し、その歌う声もききながら、なお自分は上官の命令を守って姿を現さなかったというのは、不可解に過ぎるのである。

それは戦前の教育のせいだともいうが、小野田元少尉は私より二つ年下で、私とほぼ同年なのである。しかし私の周辺には、これほどかたくなに上官の命令を守ろうとした者はいない。また、中野学校というのはどんなところか知らないが、小野田少尉がここで教育をうけたのは、たかだか三箇月ぐらいであるらしい。とすれば、これもまた一人の成年に達した男の二十九年間もジャングルで暮らした理由とするには、いささか薄弱なのではないか。たしかに、残置課者というの私は私など聞いたこともない特殊な任務で、そういうものを命じられたら、これはやはり直属

上官の命令がなければ、終戦になっても勝手に投降するわけにはいかなかったかも知れない。しかし、そういう任務であれば、なおさら自己の情況判断と独断専行は大切なわけで、いちいち上官の命令を仰がなければ動けないようでは、実際には何の役にも立たないことになる。

よく、横井庄一さんは只逃げまわって生きのびただけだが、小野田少尉は戦う姿勢で今日まで生きぬいた、そこに召集の一般兵と職業軍人である武人との差がある、などという人もいるが、果たしてそうだろうか？ たしかに、小野田少尉は最近まで、部下を持っていたし、横井さんと較べて身仕舞いもよく、その小銃はピカピカに磨き立てられていたというようなことから考えれば、そうも言える。だが、そうだとしても小野田少尉が今日まで、独力よく游撃戦をつづけてきたと考えるのは、誇張し過ぎて滑稽だろう。游撃戦の要諦はまず土地の人を味方につけることだろうが、小野田少尉は——短いインタビューの記事を読んだだけでは良くわからないが——、ルバング島民を味方につけるところか、タガログ語や島の方言さえ習いおぼえていたかどうか疑わしい。

私は、こんなことをいって何も小野田少尉を批判したり評価したりするつもりは、まったくない。そうではなく、戦前の軍国主義教育だの、中野学校だのというものを誇大に考えるのは、この際、見当違いに思われるだけである。無論、小野田少尉にこれらの影響がなかったとはいえない。しかし小野田少尉をふくめて数名の日本兵がルバング島にこもったのは、要するに置き去りにされたからであり、それは当時の日本軍が何百万の将兵を補給力も考えずに、おそろしく广大

な地域にバラまいたことに何よりの原因があるだろう。残置諜者などと、お体裁のいいことをいっても、ルバング島に残された諜者たちは、島民の間にもぐりこむことも出来ず、単に密林の中に孤立させられるだけだということは眼に見えていたのではないか？

繰り返していえば、私は小野田少尉について何も知らない。知るわけがない。ただ、少尉を「諜者」というだけで、ものものしい英雄のように考えるよりは、普通の人だったと思いたい。横井さんが町の洋服屋だったように、小野田少尉も入営前は何処かの貿易会社の社員であり、それがたまたま軍隊で情報部要員に入れられ、一年間の促成教育をうけただけで前線に放り出されて、ほどなく終戦を迎えたが、その際どんな行動をとっていいかわからなかった、そしてそのまま三十年近くも離島の山中を放浪することになった、というまでであろう。……そのアテのない放浪の歳月を支えたものは、たしかに国に対する忠誠心であったかも知れないが、人間の生きようとする意志が何にもとづくものかは、本当のところそう簡単にはわからないのではないか。

はるばる自分を探しにやってきた肉親を、つい眼前に見ながら、その呼びかけにこたえなかったのは、なぜか——？ これも小野田少尉自身が言うように、上官の命令がなかったから、とばかりは受けとれない。いくら島の情況が少尉にとって前線にひとしいものであったとしても、肉親との面会を自身に許可しないという理由はないからである。では、なぜ小野田少尉はルバング島までやってきた実父や実兄との面会を拒否したのか——？ 漠然としたことだが、それは要するに肉親と会うことが恥ずかしかったからではないか。——私は自分の小さな体験から、そう思

うのである。

終戦の少しまえ、外地から還送されて金沢の陸軍病院にいた私のところへ突然、母親が見舞いに来た。そのとき私は病院内の一室で母と二人きりで向き合うことが、何とも言いようもないほど苦痛だったのである。交通事情の悪かったその頃、病院への面会者は極めて少なかったが、私はべつに他の仲間たちへの遠慮から苦しんだわけではない。また自分がみつともない病兵であることを恥じていたというのでもない。要するに私は、そのとき一年何ヵ月ぶりかでまみえた母親の懐しさを訴えるような眠つきをみると、そのことがやり切れないほど苦しかった。そして、「早く帰ってくれ」と、母を面会所の外へ追い出すように言った。

断っておくが、私は決して剛毅果斷な性質ではない。にも拘らず、というよりだからこそ、軍隊に突然あらわれた母親の顔を見て、さところづくことが私は恐ろしかったのだ、といまになって思う。つまり、それは裏返しになった母親への、甘えであつたろうか。このことが小野田少尉にも当てハマるかどうか、もちろん、わからないことだが、ルバン島と日本との距離は、軍隊と家庭とのその何倍もかけはなれているわけであり、そこに突然現れた肉親の姿や声は、小野田少尉のさところを私の場合の何層倍もの強さで刺戟したに違いないのである。

（朝日新聞・昭和四十九年三月十二日夕刊）